

行為/体験を通して描き出される高齢者の外出を取り 巻く意味世界：同行という方法による事例的考察

松本，光太郎
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15682>

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.57-67, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：

行為/体験を通して描き出される高齢者の外出 を取り巻く意味世界：同行という方法による 事例的考察

松本光太郎 九州大学大学院人間環境学府

Describing the meaningful world surrounding the going out behavior of the elderly as seen through their actions/experiences: Consideration of cases utilizing the accompanied observation method

Kotaro Matsumoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This study attempts to understand the significance of elderly peoples' experiences while going out in their daily life. Replacing the functionalistic perspective in previous studies in the field, I adopted an approach using the "accompanying" method, which tries to follow and understand local elderly people while they are out, what they do (action) and how they feel (experience) in the "here and now". Case description and interpretation through "abduction" processes led to the three main concepts of, "Rule", "Routine", "Duration", and others. For each concept, representative episodes were described with theoretical interpretations of their meanings. Further, a conceptual model of "Implication and Inclusion" is proposed as an overarching concept for the meaningful world surrounding elderly peoples' actions/experiences while they are out. Some hypotheses regarding this model as well as the significance of going out for elderly people in daily life are presented and discussed.

Keywords: Implication and Inclusion, Rule, Routine, Duration, Selection

問 題

本研究の主題は、高齢者の日々の生活において外出することが大切であると考えた上で、外出する機会を喪失しがちな高齢者において何が問題であるのか、言い換えると、外出しなくなると何を失うことになるのかを明らかにしていくことである。具体的には、日々の生活における在宅高齢者の外出に著者自身同行し、外出をしているその時・その場所で何をして(行為)、どのようなことを感じているのか(体験)について記述を行う。そして、同行者(著者)の体験を含んだ記述をもとにした事例を考察することにより、高齢者の外出時における行為と体験に関して理解を深めること、それが本研究の主題である。

仕事や家事(主に子育て)の第一線を一步退くこと、つまりリタイヤすることによる大きな変化は「仕事場へ行かねばならない」、「家族のために～へ行かねばならない」といった必然的に外出しなければならない機会を失うことである。国土交通省(2002)が行ったパーソントリップ

調査¹⁾によると、1日のうちに1度も外出をしない人の割合は、高齢になるほど増加する。50～64歳が13.3%であるのに対して、65歳以上は35.5%の人が1日のうちに1度も外出しておらず、リタイヤ前後の変化として注目すべきであろう。

高齢者の外出に関しては、外出を支える環境整備の問題としてモビリティの問題がしばしば取り上げられている(タウンモビリティ推進研究会, 1999; 秋山, 2003)。それらの議論・実践において、外出することは意味のある行為であることが前提とされているように思われる。外出行動に関連すると思われる知見としてCarp(1971)は、リタイヤ後の人々における移動手段として歩くことの意味を問うている。しかし、内実は歩くことに関連する条件間の因果分析(e.g.歩行に対する満足度と歩行頻度)を行うに留まっており、歩くことの意味を十分に明らかにしているとは言い難い。また、松本(2004)では、これまで行われてきた外出に関連する研究知見(e.g.竹嶋(1994))について再検討が行われている。そのなかで、外出を取り上げた多くの研究は、高齢者の日常生活における活動性や社会性を量る指標として外出を取り上げていること、そして、外出という行為そのものを主題化した研究が少ないことを指摘している。さらに、堀(2000)は、機能主義的アプローチの肥大化の結果、計量的・指標的アプローチが多数を占め、高齢者自身の生活経験から乖

¹⁾ パーソントリップ調査とは、交通の主体である人の動きを調査することにより、主に人はどのような交通手段で動いたのかについて把握するものである。平成11年度調査は、10月と11月の平日と休日の各1日ずつ、全国98都市で行われ、各都市に居住する500世帯が調査対象となっている。調査方法はアンケート調査であり、世帯構成員全員の1日の行動内容について記載することを求めている。

離している老年学の現状に再考を促している。副田(1997)においては、社会老年学において「主観的幸福感」を代表とする概念/指標が無反省に多用されることに対して批判的見解を示している。無藤(1997)によると、ある機能を代表するとされる指標(パラメーター)に関して、指標の多くは行為のレベルで何に対応しているか分からず具体的な行為のレベルでの示唆をほとんど与えない。そして、どの方法もどの指標も実体化すべきでなく、具体的な行為のなかでの検討に絶えず引き戻しつつ分析すべきであるとされている。

これまで高齢者の外出に関して、松本(2004)は自由記述アンケートによって外出の形態、特に目的地に向かう過程で起こる立ち寄り行為について検討した。また、松本(審査中)は外出時の行為そのものを観察することによって、日々の生活において外出することの意味と価値につ

いて検討した。これらの研究において、「今・ここ」の行為/体験が連なっている様態、言い換えると、様々な他者性(もの、場所、環境、状況の中の人、自身の身体)との出会いが連なっていく過程そのものが外出の意味と価値であることが明らかとなっている。

以上、高齢者の外出に関する研究知見の現状を踏まえた上で、本論では何かしらの指標を用いた機能論的な理解ではなく、同行者の体験を含めた外出時の具体的事例を通して、外出時の行為と体験に関して考察を行う。その上で、高齢者の日々の生活における外出の大切さを理解することが本論の主題である。

方 法

調査協力者の概要 今回、広島市D地区と福岡市N

Table 1
調査協力者のプロフィールおよび外出の概要

名前(仮称)	居住形態	同行調査時の外出理由	外出ルート	外出時間
広島D地区				
高田さん(男性)	実子と2人暮らし	午前から午後にかけて、毎週火曜日に通っている隣の店(八百屋)へ自転車で出かける。	近所の豆腐屋-一旦帰宅-八百屋-お菓子屋-帰宅	110分
篠原さん(女性)	息子夫婦との2世帯住宅(玄関別)の1階に1人暮らし	日が陰る頃、ほぼ毎日行く近所にある複合型スーパーへ散歩がてら出かける。	スーパーに入店-食料品売場(1階)-家電と文具売場(5階)-帰宅	55分
佐藤さん(男性)	夫婦で2人暮らし	日課である朝の散歩(6時半出発)をするため、D地区のそばにそびえ立つ比治山へ夫婦で出かける。	比治山-ラジオ体操-ウォーキング-山下り-帰宅	75分
三浦さん(男性)	2世帯住宅(玄関一緒)に夫婦と息子家族	午後から、週に数日通っている市街地へ散歩がてら向かう。	デパート巡り-市街地をぶらつく-喫茶店-帰宅	130分
新庄さん(女性)	1人暮らし	他県に住む息子家族にみかんを送ることを果物屋に頼んでいたため、午後からその代金を払いに行く。	果物屋-魚屋-帰宅	35分
北野さん(男性)	夫婦で2人暮らし	午前中に、2週間に1度の水泳教室へ参加するため、市民プールへ自転車で向かう。	プール-帰宅	135分
福岡N地区				
富永さん(女性)	1人暮らし	朝から電車、地下鉄を乗り継いで、定期的な検診(白内障)のために眼科へ向かう。	地下鉄-眼科-駅構内のスーパー-地下鉄-帰宅	180分
村田さん(男性)	夫婦で2人暮らし	午前から午後にかけて、村田さんが所有している不動産関係の財務処理などを行うための銀行まわり、さらには街中での散策を兼ねてバスで市街地へ向かう。	バス-銀行-証券会社-昼食-銀行-郵便局-バス-歩く-帰宅	240分
仙田さん(女性)	夫婦で2人暮らし	朝、ほぼ毎日行っている近隣地域での精力的な散歩へ出かける。	河川敷-小高い山を登る-山の上の道を歩く-徐々に下がり帰宅	60分
高橋さん(女性)	1人暮らし	午後から、不定期ではあるが度々訪れる市街地へショッピングをするためにバスに乗って出かける。	バス-ファッションビル-地下街-書店-昼食-バス-帰宅	210分
松岡さん(女性)	1人暮らし	午後から、日用品、食料品を買いに行くために近隣のスーパーへ出かける。	スーパー-周りにある個人商店-帰宅	40分
松岡さん(女性)	1人暮らし	午前中、隣の公民館で催される文化祭に車で出かける。途中、友人と合流。	駅-公民館-蕎麦屋-スーパー-駅-帰宅	225分

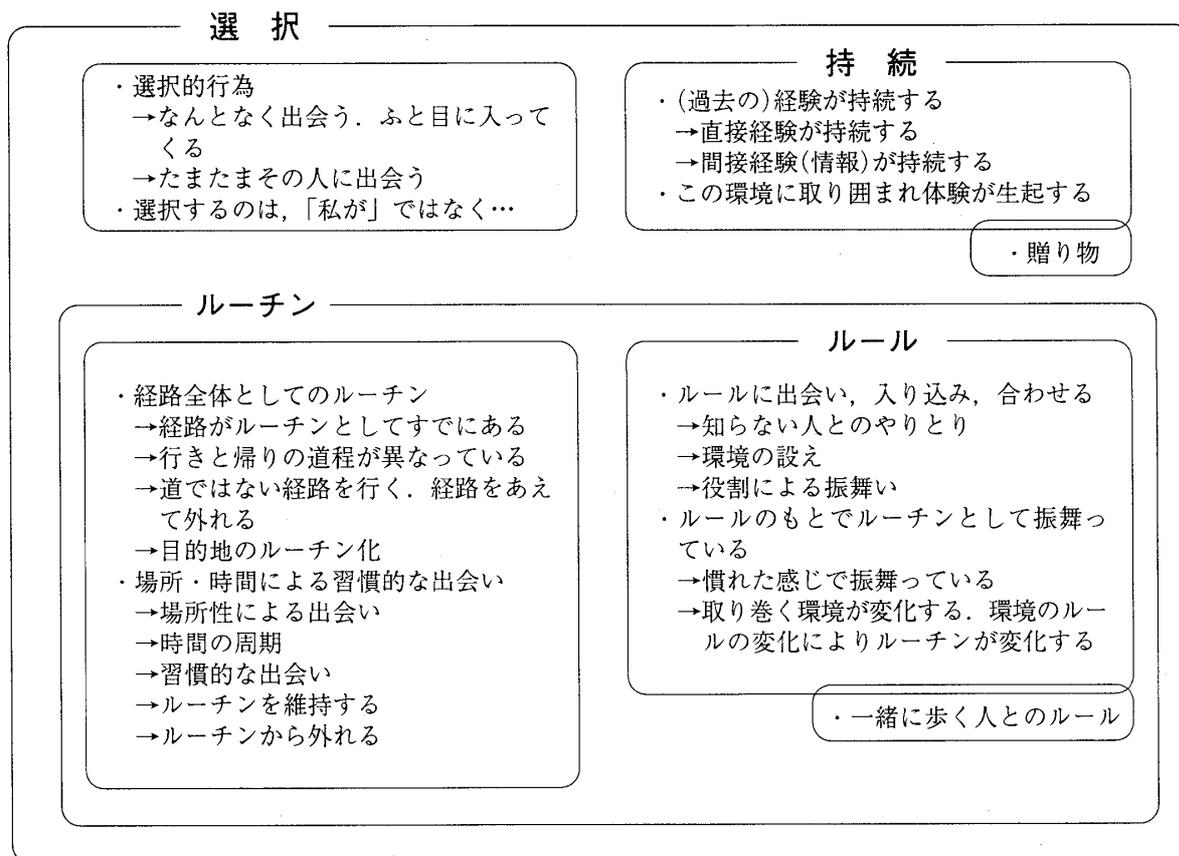


Fig.1 外出時の行為/体験に関する分析の結果

地区に居住している11人へ調査協力を依頼し、12回の同行調査を行った(以後、氏名は全て仮称である)。調査協力までの過程はそれぞれで異なっている。広島市D地区居住の調査協力者は、D地区再開発に関する研究チームに本調査者が参加し、その際知り合った人である。福岡市N地区居住の調査協力者には2つのグループがある。1つは、松本(2004)のアンケート調査時に聞き取り調査を依頼し、聞き取り調査を行った後、さらに同行調査の依頼をし、了解された人(村田さん、仙田さん、高橋さん)である。2つ目は、調査者自身の個人的な知人(富永さん、松岡さん)である。調査協力者に共通するのは、仕事や家事(特に子育て)の第一線を一步退いている、つまりリタイヤしている点である。

調査地域の地理条件 広島市D地区は、市中心部から約2km、JR広島駅から約1kmに位置する。市中心部である八丁堀・紙屋町からの交通機関はバスを利用する。福岡市N地区は、市中心部から約6kmに位置する。市中心部である天神・博多駅からの交通機関はバス、もしくは地下鉄と私鉄を利用する。両地区ともに、住宅地と考えると差し支えない。

調査時期 本調査は、1999年3月から12月まで断続的

に行った。同行調査前には外出に関する聞き取り調査を行い、同行調査後にも近況の聞き取りを断続的に行っている。

調査手続き 本研究では同行調査を行った。同行調査とは文字通り、調査者が調査協力者の外出に同行することである。ともに歩いて移動することがほとんどであったが、自転車や公共交通機関を使い移動する場合もあった。具体的な同行調査の手続きは以下の通りである。同行中記述したい調査協力者の行為/体験に出会ったとき、我々を取り囲む周りの環境に同行者(調査者)が出会い/体験した調査協力者の行為/体験を意識的に関連づけておく。そして、調査協力者との外出が終了した後、同行者が数回同行時と同じルートを周り、調査協力者の行為/体験を体験したその場所でエピソードを記述した。

記録は調査開始当初、記録メディアの使用を調査協力者に依頼したが、メディアを使用されることに異和感を感じ「いい気分がしない」(富永さん)と断られた。その後ビデオやカメラ、録音機等のメディアの使用を依頼することはしなかった。また、2人で並んで歩く外出であったため同行中メモをつけることは差し控えた。よって同行中、同行者が調査協力者を「見る」という気分が強かつ

たようにも思われるが、一方でビデオのように「記録する」といったものでもなかった。行為者の横を並び歩いている調査者の気づきを記述していったことが本調査の行ったところである。

分析手続き 分析の結果は Fig.1 に示したが、その結果に辿り着くまでのプロセスは以下の通りである。まず調査協力者との外出が終わった後、同行ルートを巡り、起こった出来事をその場所においてメモに記した。そのメモを土台に同行者が当日帰宅(帰宿)後フィールドノーツを直ちに作成した。そして分析手続きは、フィールドノーツを一文ごとに分け、各々から読み取れることを記す作業、つまり解釈を行い、その解釈全てをカードに書き抜いた²⁾。なお、解釈は外出に同行した著者がフィールドノーツを読み、それぞれの部分に含まれると読みとれた意味を取り出している。次に、解釈を記した全てのカードの分類・整理(空間的配置も含む)を行った。分類・整理のやり方は、カードを床に敷き詰め、まずは単純に似ているカードを重ねていく。重ねた後、それぞれのカードの山同士が同じではないか、重なるところがないかを確認する。同じであれば合流させたり、似ているところがあれば近いところに置いたり空間的配置を行う。また、山に分けられた個々のカードが他の山に入れるほうが相応しくないかを確認するため、山の中のカードを点検して必要ならば移動を行う。最後に、それぞれの山をいくつかのグループに分けることが出来ないかを検討する。これらのプロセスを(1回ではなく)繰り返した結果が Fig.1 である³⁾。Fig.1 の枠で囲まれた部分(e.g. 選択)がカードの山となっていた集合である。そして、枠の中に書かれている中点“・”以後の言葉はカードの山をいくつかのグループに分けたものである。最後に、矢印“→”以後の言葉は山を分けたグループをさらに分けたものである。

結果と考察

上記の分析手続きによって Fig.1 が導き出された。本結果においては、Fig.1 の理解を中心に行っていく。具体的には、Fig.1 に記してあるそれぞれのグループに関して簡単な解説を加えた後、さらに具体的なエピソードを提示し、エピソードに対する解釈を加えることで理解をより深めていこうと考えている。

ルール

ルールとは Fig.1 を見ると、大きなグループとして「ルールに出会い、入り込み、合わせる」、「ルールのも

とでルーチンとして振舞っている」と記してある。まず「ルールに出会い、入り込み、合わせる」とは、いくつかの場面を指している。具体的には、店、銀行、病院、地下鉄やバスといった交通機関、横断歩道などであるが、その環境を満たしているルールによそからやってきた行為者は出会い、入り込み、そして合わせていることを表している。また、外出時には「知らない人とのやりとり」が起こるが、それはある「環境の設え」において、その環境のルールの中で互いに「役割による振舞い」をすることによって成立していると理解した。具体例としては、店の店員とお客とのやりとりである(e.g. 富永さんにおけるスーパー内の薬局)。

次に、「ルールのもとでルーチンとして振舞っている」であるが、行為者は取り巻く環境のルールを会おう前から了解しており、そのルールの中を「慣れた感じで振舞っている」ことを表している。具体例としては、銀行での事務手続き及び行員とのやりとり(村田さん)である。

外出中移動する中で行為者を取り巻くルールは、その時々を取り巻く環境によって変化していく。その時々には、その環境を満たしているルールに行為者は出会い、入り込み、そして合わせているという行為/体験が起こっていると理解した。

以下に具体的な外出時の2つのエピソードと、エピソードに対する解釈を示すことで本分析によって導き出された「ルール」についてさらなる理解をしていきたい。

エピソード1 早朝、佐藤さん夫妻は、自宅から数分のところにある比治山へ散歩に出かける。私⁴⁾にとって2人の歩くスピードは速すぎ、行程が分からないこともあり少し後ろからついていく。2人は、山の上にあるウォーキングコースをすれ違う人と挨拶を交わしつつ早足で歩いていた。比治山を半周した後、比治山を下り、一般道(D地区とは比治山を挟んで逆側)に出て歩道を歩いていく。この一般道に入ると、2人の足取りは少し緩やかになり、特に孝子さん(妻)が健次さん(夫)にいろいろ話しかけ2人の会話が多くなっていく。地理的条件が変わり、足取りが競歩モードから流しモードに入る。一般道に入ると挨拶はしない。歩道ですれ違うのは通勤・通学の人が多かった。

エピソード1では、2人の行為が取り巻く環境によって異なっている様子が伺える。山上のウォーキングコースでは、早足でウォーキングをし、すれ違う人が知らない人であっても挨拶をしている。これは、取り巻く環境に相応しい振舞いをしていると言えるだろう。一方、一般道に入ると足取りが緩やかになり、通常の移動の足取りになっている。さらに、すれ違う人と挨拶を交わすことがない代わりに、連れ添いとの会話が多くなっている。これも一般道という取り巻く環境において至極当然な振舞いをしていると言えるだろう。仮に一般道ですれ違う

²⁾ 解釈を記したカードは322枚であった。

³⁾ 松本(審査中)では、同じカードを使い Fig.1 とは異なる知見(「外出時に何と出会っているのか」)を導き出している。

⁴⁾ 私とは、同行者(調査者)でありかつ著者のことである。

人に挨拶をするならば、それこそ奇怪な行動と受け取られるのではなかろうか。このように取り巻く環境によって相応しい行為の様式があり、エピソード1が示すように取り巻く環境の移行、つまり、行為者を取り巻くルールの転換により外出時の行為は変化していく。外出時に取りうる行為とは取り巻くルールに依存していると言えるだろう。

エピソード2 お昼過ぎ、高橋さんと私は天神(市街地)へ向かうため、N地区の最寄りのバス停に向かう。国道3号線にまずは出て道路沿いの歩道を歩いていた。すると、バス停まであと20mといった地点で私たちの横をバスが追い抜いていった。私はどうするのかなど思っていると、高橋さんは少しずつ早歩きになり最後は走り出した。停車していたバスは発車するために一旦ドアを開めたが、走ってきた私たちを乗せるために再びドアを開き、私たちはなんとかバスに乗り込んだ。

エピソード2は、目の前に停まったバスに乗るため高橋さんが走った場面である。その日、高橋さんは特定の時間に決まった用事はなく、別段急いでいたわけではなかった。けれども、バスが目の前を通り過ぎた時、そのバスに乗ろうと走り出している⁵⁾。このように、急いでいないのに間に合うなら多少無理してでも乗ろうとする行動はさほど不思議ではないように思われる。このエピソードから、行為者がその時取り囲む環境のルール(e.g. バスのシステム)に出会い、思わず合わせたことが読み取れる。エピソード1において示した通り、外出場面では、自分の意志判断によって行為するという意味で主体的ではなく、取り巻く環境のルールに動かされた行為というものが存在するように思われる。さらに、ここで重要だと思われるのは、バス(の運転者)が走ってきた私たちを待ってドアを開けたことである。行為者は環境のルールに取り囲まれ受動的とも言える行為をとる一方で、行為者の行為によってバス(の運転者)の行為を引き出している。仮に、私たちが走りこんで来なければ、バスは停留所にいる人を乗せ直ちに出発したはずである。取り巻く環境のルールは行為者が取りうる行為の可能性を内包しており、その大まかな範囲を行為者はすでに知っている(e.g. この距離まで走ってくれば大体ドアを開けてくれる)。このように外出時には、行為者は環境のルールに取り囲まれ、そのルール内において取りうる行為の選択の幅を知りつつ行動していると言えるのではなかろうか。

上記の2つのエピソードから、外出時の行為者は様々なルールに出会い、そのルールに入り込み、取り囲むルー

ルに相応しい振舞いをしていることがまずは読み取れるだろう。その上で、行為者は環境のルールに取り囲まれ、ただ受動的に動かされるのではなく、ルール内での選択しうる行為を遂行していると言えるだろう。

ところで、これまで取り上げたエピソードは、同行者が隣で歩きながら行為者を取り巻くルールとして読み取った事象である。通常行為者は、その時取り巻くルールを当たり前のこととしてその内で行う。行為者が自身を取り巻く環境のルールに出会うことが出来るのは、ルールが変化した時である。この取り巻く環境が変化することによって、行為者が環境のルールに初めて出会うことが出来るということは、「環境のルールの変化によりルーチンが変化する」に関する事象である。前述したように外出時においては、「ルールのもとでルーチンとして振舞っている」ことが日々の外出においては常態であると思われる。仮に、取り巻く環境のルールに変化があったとして、変化による行為/体験のルーチンへの影響は、ルールが変化した行為者がその変化に気づいた時に起こる。具体的な事例として、“散歩中いつも見かけていた(彼女の)家の前をほうきで掃いていた女性がいなくなった⁶⁾”(三浦さん)という状況では、その時三浦さんを取り囲む環境のルールが変化していると言えるだろう。その女性がいるかもしれない環境であれば、通過する時今日はあるのか気にしたり、視線が合えば挨拶をしたりするのではないか。その女性がいなくなった環境では、取り巻く環境のルールが変化した、環境に出会った時の一連のルーチンとしての行為/体験が変化していると理解した。一方で、仙田さんが今通過している河川敷で“最近、植木の植え替えをやっている”ことをすでに知っている。そのことは環境の変化をすでに了解しているため、その変化(植木の植え替え)を含んだルーチンとして、河川敷という環境のルールに出会っていると理解できるだろう。ルールの変化に出会い、ルーチンに多少の揺れが生じたとしても、また新たなルーチンへと収束していくのではなかろうか。

ルーチン

ルーチンとはFig.1を見ると、大きくは「経路全体としてのルーチン」、「場所・時間による習慣的な出会い」に分けられる。順を追って触れるが、まず「経路全体としてのルーチン」とは、外出時の経路を通り慣れているため、いくらかの進路選択の幅があるにもかかわらず迷うことなく進んでいく事態を指している。この経路とは、道路だけでなく、電車やバスなど交通機関の選択(e.g. 時間指定の電車に乗り、他の選択肢があるにもかかわらず乗り換えの駅を決めていること)、入る店の選択などを含む。また、「経路全体」と記しているのは、家を出て帰ってくるまでの外出の経路は、仮にある場所へ行って帰ってくるという道程であっても、行き帰りの経路が異

⁵⁾ なお、Nバス停から天神へ向かうバスは頻繁に出ており、仮に次のバスを待ったとしても長くても10分程度である。

⁶⁾ その家では葬儀が営まれていて、三浦さんは彼女の葬儀であろうと推測していた。

なっていることを指している⁷⁾。つまり、経路全体として一つのまとまりをもっている。関連して「経路をあえて外れる」というのは、行きと帰りほぼ同じ道程を進んでいても、“帰り道に少し違う道程を選ぶこと”(e.g.三浦さん“「ずっと同じ道来たけど、ここだけは違った道を行くんだよ」と私に一言言って、一本筋の違う国道沿いの歩道に出て家に向かう”)、そしてその違う道程を選ぶことが常態である、つまり外れることがルーチン化していることを指している。その他にも、佐藤さんが山へ散歩に行くために“けもの道のようなところを通っていく”こと、つまり通常道ではない道がいつもの経路となっていることや、目的地(e.g.眼科、八百屋)も経路の中のルーチンの一部となっていることが示されている。これらのことから、外出時の経路とは家を出て帰ってくるまでの一つの連なりとしてルーチンが形成されていると理解できるのではなかろうか。

次に、「場所・時間による習慣的な出会い」とは、外出時における、ものや環境、そして人との出会いが場所と時間による求心的な作用によりもたらされ、その出会いは必然でも偶然でもなく、習慣的な出会いであることを指す。まず「場所性による出会い」とは、ものや環境、そして人に出会うことが、ある場所において日々当たり前前であること、つまり常態であることを示している。具体的には「スーパーのレジでポイントカードをサッと出す」(篠原さん)、「山の中腹で街に向かって一礼する」(佐藤さん)といったエピソードが挙げられる。以下の高田さんがほぼ毎日通っている豆腐屋さんでのエピソードを検討することでさらに理解していきたい。

エピソード3 午前中、高田さん宅を出て、一緒に自転車に乗りS豆腐店へ向かう。高田さんの自転車を運転する動作はかなり機敏である。D地区の真ん中を貫く通称36m道路にまずは出る。信号を渡り、裏に一本入った道を進み、S豆腐店に到着する。高田さんはビニール袋から(家庭で使うような)プラスチックの容器を2つ取り出し、店の軒先に置いてある機械の上にそれを置く。店の女将さんらしき女性は何も聞かず、置いた容器とは別の容器に豆乳を入れ機械の上に置く。ここは店の中に入らず、軒先でやりとりをするようである。次に、女将さんは「豆腐まだあったかな!?’と笑いながら店の中にある水の入った大きな容器の中をすくい、「あった!あった!見つけた!」と言って豆腐を別の容器に入れて持ってくる。豆腐と豆乳の代金を機械越しに渡し店を出る。ここでは、高田さんから声を出すことはなく、女将から言葉を掛けられ高田さんは頷いたり笑ったりしていた。

⁷⁾ 本同行調査の中で、新庄さんは果物屋と魚屋で買い物をした後直ちに帰宅したが、行きと全く異なるルートを通って帰った。また、村田さんは市街地への行き帰り、バスに乗り出かけたのだが、帰りのバスでは途中下車をして歩いて帰って行った。

その時々を取り囲まれる環境によって、当たり前とされる暗黙のルールがあることは既に議論した。エピソード3では、ほぼ毎日通う豆腐屋さんの軒先で、高田さんから何ら言葉をかけることなく、ことが進んでいく様子が示されている。この時高田さんはその店がどのようなルールに満たされ、その中でどのようなやりとりがあるのかをすでに了解し振舞っていると理解した。外出時にいつもと同じ環境に出会い(入り込み)、その中でやりとりは半ば習慣化したもの、つまりルーチン化していることがここでは言えるのではなかろうか。その他にも、同行中近所や近隣のスーパーなどで近所の人に度々出会っていたが、これも偶然ではなく場所の近さによる求心性があるように思われる。

さて、これまで場所性に注目してきたが、以下の早朝の散歩に関するエピソードを検討することにより、場所と時間の絡まりによって習慣的な出会いが生成していることを理解したい。

エピソード4 佐藤夫妻と早朝の散歩へ出かける。まずは比治山へ向かうため、通称36m道路に出る。信号を待っている時、同じ交差点に止まっていた自転車に乗った男性(70歳ぐらい)から「今からかい?」と声をかけられ、「そうです」と健次さんが返す。信号が変わり横断歩道を渡る。別々に横断歩道の向こうから歩いて来た女性2人(2人とも70歳代ぐらい)が各々佐藤夫妻に「おはようございます」とあいさつをする。佐藤夫妻もあいさつを返し、1人には「昨日はどうも」とさらに声をかける。健次さんは私に「この人達は定時(6:30)に比治山の上でラジオ体操をして、もう降りてきているんだよ」と教える。

早朝、佐藤夫妻を含め多くの中老年が比治山に上り、ウォーキングをしたり、集まって体操をしたりしている。そのため、山上へ向かう道中においても知人と出会うことは多い。このような出会いがあるのは、日々特定の時間・特定の場所へ外出するためであろう。そして、その時間・その場所には様々な人との出会いが存在し、かつその時間・場所だけ可能な行為が存在すること(e.g.ウォーキング中の挨拶)を行為者はすでに了解していると理解した。この時間・この場所で様々な出会いや行為/体験が起ることは日々の習慣であり、すでに行為者には了解されている。このようにある時間・場所において行為/体験が生起することをすでに了解する中で外出をして、習慣的にこの時間・この場所で行為/体験が生起することを「場所・時間による習慣的な出会い」として理解している。

さらに「場所・時間による習慣的な出会い」に関して、もう1つのエピソードを示すことで、「時間の周期」に関して理解を深めたい。

エピソード5 スーパーへの外出(Table1参照)から帰

宅した後、松岡さんから「明日隣の公民館で文化祭があり私は観に行くが一緒に行くか？」と誘われ、私は2つ返事で同意した。当日、隣の駅で松岡さんと待ち合わせをして、歩いて公民館に向かった。そして公民館で松岡さんの友人と合流し、一通り文化祭を見終わった後、昼食を取るため近くにある蕎麦屋へ向かった。途中向かっていた店から松岡さんの知人が食事を終え出てきた。互いに嬉しそうに2、3言葉を交わす。話を聞いていると同じ絵の教室の人らしく、この一行(5~6人)は今から公民館で催されている文化祭に向かうらしい。我々は店に入り、2人はやまかけうどんを頼む。私は2人に勧められセットのようなものを頼んだ。待っている間、松岡さんの友人がふと思い出したように話し出す。先ほど観た文化祭に2年前来た時、同じように2人で文化祭を観た後この蕎麦屋で食事をとったという話だった。松岡さんは話を聞いた後、しばし記憶が定かではないようだったが、後に思い出し同意していた。

エピソード5は、今ここでの行為/体験がある周期性をもって起こっていることを示している。2年という間隔が空いているため常連とはいいがたい。一方で、文化祭の帰りこの蕎麦屋に立ち寄ったことは偶然ではないだろう。松本(2004)において示唆されるように、文化祭に行くことに加えて、蕎麦屋へ立ち寄ることもこの外出のルーチンとして理解すべきであろう。エピソード2に示した高田さんの外出において、豆腐屋へ行くことは毎日の日課であり、かつ同行した一連の外出は毎週火曜日八百屋の売り出しの日と決まっていた。このように、毎日ではないが、周期性を持つルーチンとしての外出は多く存在するように思われる。ここでいうルーチンとは、時間の周期(定時、毎日、週ごと、月ごと、季節ごとなど)で繰り返されることだけに限定されるのではなく、イベントごと、店側のスケジュール、集合体の緩やかなルールなど行為者を取り巻く環境のスケジュールによって、行為/体験のルーチンが形成されていることも指している。

またエピソード5で注目すべきは、蕎麦屋に居ることによって、2年前にも同じルートを周ったと想起したことである。つまり、この場所に居ることによって初めて、今この想起するという行為/体験が生じたのではなかろうか。また、この想起は思い出すといった行為/体験ではなく、思い出してしまったという行為/体験である。この時の想起は今ここに居ることによって与えられたものである。まとめると、この場所にルーチンとして蓄積する行為者の(過去の)経験は、今ここに居ることによって与えられると言えるのではなかろうか。この場所に居て、この環境に取り囲まれることが重要だと考えている。この想起は場所と時間に関する事例にも読めるが、後に議論する「持続」にも関連するため、さらに後ほど

議論する。

ところで、エピソード1と4に示した佐藤夫妻は、その後(2003年時点)もウォーキングとラジオ体操を続けている。著者は規則正しく毎朝ラジオ体操を行っていることに興味を持ち、「どうして毎朝ラジオ体操をするのか？」と愚問を承知で投げかけた。夫の健次さんはラジオ体操を始めた理由を、退職前には会社で始業前ラジオ体操をしていて、退職後健康のためと思いラジオ体操を始めたと話された。また、「退職前には、仕事に9割『心と身体』がとられていた。それを何で埋めるのか考えた」、「犬を飼ったこともあった。今思えば、何かしなきゃと思い犬を飼った」など退職後開いた穴をいかに埋めるか苦心した旨が語られた。犬を飼うなど試みるが、退職前にルーチンとして行っていた体操にウォーキングを新たに付け足して、退職後のルーチンを創り出していった経過が語られた。このようにある周期をもって当たり前前に繰り返される行為、つまり「ルーチンを維持する」ことがリタイア後の生活においてそう簡単ではないことが窺える。

最後に、外出時の行為/体験として「ルーチンを外れる」ということが見られた。これは、「無意図的にルーチンから外れてしまう」場合と「あえてルーチンから外れる」場合がある。前者は、例えば「道を間違う」(e.g. 北野さん、三浦さん)という事態である。いつもと同じ道を進んでいるはずが、ある瞬間知らないところに入り込んでしまっていることに気づく。そのような行為/体験を「ルーチンから外れる」としている。また、後者は「ルーチン」の冒頭で触れた「経路をあえて外れる」と同義である。

以上の議論より、ルーチンとは、1つに、ある時間・場所において行為/体験が生起することを行為者がすでに了解する中で外出をして、習慣的にこの時間・この場所で行為/体験が生起することを指している。2つ目として、外出時のほぼ定まった1つの連なりとしての経路を、言い換えると一連のまとまったルートを、ルーチンとして理解している。

持 続

持続とはFig.1を見ると、大きなグループとしては「(過去の)経験が持続する」、「この環境に取り囲まれ体験が生起する」の2つであった。まずは、持続という言葉が指し示す事象を把握するために、以下のエピソードを見ていきたい。

エピソード6 夕方、篠原さんと私は近隣にある複合スーパーへ出かける。スーパーにたどり着き、1階の食品フロアを回っていく。まずは今日の買物で唯一購入予定だったコーヒー用のミルクをかごに入れ、さらにフロアをグル〜ッと回っていく。そして、鮮魚売場の前を、魚を眺めつつ変わらぬ足取りで通り過ぎようとしていた。

しかし、少し通り過ぎたところで篠原さんは唐突に鮮魚売場へ引き返し、抱えるかごの中に子鯛(280円)を2パック入れた。

篠原さんは魚を眺めながら変わらぬ足取りで歩き、一旦そこを通り過ぎようとしていた。しかし、突如後戻りをして魚の入ったパックを手に取りカゴへ入れている様子が示されている。篠原さんが魚の入ったパックをカゴに入れた今ここの行為には、先ほどまで魚を見ながら歩いてきたという行為が介在していると言えるだろう。これは、「魚をさっきまで見ていた」という行為と「今魚のバックをカゴに入れた」という行為を、過去の経験が今の体験を決定しているといった双方を切り離し因果論的に理解しているのではない。Bergson(1889/2001)の「純粹持続」に関する議論によると、現在の状態と先行の状態に分離を設け、前後関係を持つ空間化された時間として私たちの意識は体験をしておらず、(本来的には)相互に浸透し、同時的な体験として受けとめられている。Bergsonに倣えば、篠原さんの魚をカゴに入れるという今ここの一連の行為の流れの中に、魚を眺め歩いてきたという行為の持続が入り込んでいると理解すべきだろう。また、今ここの行為/体験が生起することによって初めて過去の経験が今ここの行為/体験に介在する形で現れるのである。このことは、「過去の直接経験の持続」が「(今ここの)出会いによって現れる」と理解することが出来るだろう。

エピソード6は1つの事象の流れの中で持続が起こっていることを理解するため微視発生的な行為/体験を提示した。以下のエピソードでより一般的と思われる持続の感覚を理解したい。

エピソード7 午後新庄さんと近所の果物屋へ行き、後に隣の魚屋に移動する。新庄さんは、魚を刺身用にさばいてもらうよう店員に頼む。店先で待っている間、カウンターの向こうにいた女将らしき女性と世間話を二言三言交わっていた。そのなかで、新庄さんがふと『煮付けをするとき砂糖を入れるかどうか』を訊ねる。話を聞いていると、砂糖を入れる/入れないで新庄さんの娘さんと意見が食い違ったらしい。女将さんの返答が新庄さんと同意見だったため、安心したような納得したような表情を見せる。気になっていたのだろうか、会話の流れの中でふと思いついたように訊ねていた。

エピソード7において、新庄さんが魚屋の女将さんに対し思いついたように煮付けの作り方を訊ねている。以前作り方に関して娘さんと話した折、意見が異なったため訊ねたようである。この新庄さんが魚屋の女将さんに訊ねるといふ今ここの一連の行為の流れには、意見の相違という過去の経験が入り込んでいると言えるのではない。言い換えれば、意見の相違という過去の経験が新庄さんはどこか気になっていた、そして過去の経験の持

続が尋ねるといふ今ここの一連の行為の流れに介在していると言えるだろう。

また、この訊ねるといふ行為はいつ・どこでも生じたわけではない。訊ねることが許され、応えるに相応しい相手がいる場合に可能な行為であろう。この訊ねるといふ行為は、魚屋という場所で女将さんに尋ねるタイミングを見出すことで可能な行為である。時間と場所がうまく交差して初めて今ここの行為/体験が可能になる。

その他の事例として、先に示したエピソード5において、松岡さんら2人が2年前にこの場所(蕎麦屋)に居て、その時も同じ用事(公民館での文化祭)で来た後に立ち寄ったことを思い出していた。この場所に2人で居ることによりこの場所における過去の経験が思い出される、それが外出時における持続の感覚である。その他にも、「橋を渡っている時に橋にまつわる自分の経験(e.g.子ども時代ここで遊んでいたこと、自分は泳げなかったこと)」を話したエピソード(三浦さん)や「進行方向にある交番を見て、以前の経験(長期間の駐車違反を連絡したがなかなか来てくれなかったこと)」を話したエピソード(高田さん)など今ここの行為/体験(e.g.歩いて懐かしく感じる、見て腹立たしく感じる)に過去の経験が入り込んでいるエピソードがみられた。

ところで、これまでは過去の直接経験が、今ここの出会いによって、今ここの体験で生起することを示した。外出時には間接的な経験(e.g.広告チラシやテレビで観た情報)を今ここの出会いによって了解する場面が見られた(e.g.明日のスーパーでの売り出しを知らせる折込広告を見た後、スーパーに行き広告に出ていた品を確認する)。ただ間接的な経験(情報)であり続けるのではなく、直接的な今ここの体験をすることにより、確かな存在として了解されているように感じられた。

James(1880/1999)や Mead(1932)は、「見かけ上の現在(Specious present)」という概念を用い、過去、現在、未来のリアリティは現在発生する出来事の経過に表れるとしている。行為/体験が今ここのただ連なっていく、その連なりの中に過去の経験の持続が入り込んでいると言えるだろう。そして、重要であるのは、外出をして今この場所に立ち、この環境に取り囲まれることである。行為者が今この場所(e.g.橋の上、交番の前)にいることは、過去の経験の持続が今ここの行為/体験に入り込む機会を提供し、身体をもって、迫真性をもって今ここの体験を感受するという点で重要であると考えられる。

総合考察

これまで Fig.1 に関して、特にルール、ルーチン、持続という3つのグループを丁寧に理解してきた。まずルールとは、行為者が外出時に様々なルールと出会い、その

ルールに取り囲まれる中で相応しい振舞いをしていることであった。その上で、行為者は環境のルールに取り囲まれ、ただ受身的に動かされるのではなく、ルールの内で選択しうる行為を遂行している。次にルーチンとは、1つに、ある時間・場所において行為/体験が生起することを行為者がすでに了解する中で外出をして、習慣的にこの時間・この場所で行為/体験が生起することを指していた。2つ目として、外出時のほぼ定まった一つの連なりとしての経路、言い換えると一連のまとまったルートをルーチンと理解した。最後に持続とは、今ここの一連の行為/体験の流れに、過去の経験の持続が入り込んでいることであった。また、持続とは過去の経験が今ここの行為/体験に介在することによって初めて現れると理解している。

さて、これまでの議論をもとに、外出時の行為/体験をどのように捉えるのかについて総括する。

外出時の行為/体験～包含という言葉～ まず、外出時に起こる行為/体験として、行為者を取り囲むルールの存在を明らかにした。人と環境を主体と客体に分け、主体の意志・判断により自律的に行動するという意味で、人は「主体的」に行為/体験しているわけではない。エピソード1, 2から読み取れるように、外出時に行為者は、その時に取り囲む環境のルールに沿った振舞いをしている。つまり、Fig.1に示されたように今ここの行為/体験は「選択的」なものではなかろうか。例えば、「なんとなく出会う」、「ふと目に入ってくる」、「たまたまその人に出会う」といった曖昧で偶然と捉えられるような出会いにおいても、ある環境(ルール)内において行為者がそちらに気持ちをわずかでも向けていることは間違いないだろう。また、今ここの行為/体験とは、過去の経験から連続するルーチンが入り込んでいることは既に示した。そのように「なんとなく出会う」、「ふと目に入ってくる」、「たまたまその人に出会う」という出会いにおいても、偶然的な行為/体験ではなく、また受動的な行為/体験でもなく、ある環境内における選択的な行為/体験、もしくは能動的な行為/体験ではないかと考える。

Reed(1996/2000)によると、行為者の外にある環境の意味と価値は一種の資源であるとされている。ここでの環境の意味と価値とは、その場においてある行為が可能になる機会のことである。そして、Reedは意味と価値が実現(利用)される様態を「選択」という言葉で表している。ルールに沿った上での様々な行為とは、行為者がその時にいる環境のルールに取り囲まれ(包まれ)、その場所における行為可能性から能動的に選択していることであると言えるだろう。

次に、外出時の今ここの行為/体験には周期性(ルーチン)や過去の経験の持続が入り込んでいることが挙げられる。エピソード3～5において、外出時の行為はある

周期性(ルーチン)を持ち、そのルーチンをすでに分かった(含意した)上で外出時の行為が成り立っていることを示した。また、エピソード6,7において、今ここの行為に過去の経験の持続が入り込んでいることを示した。このように、外出時の今ここの行為/体験とは偶然の産物ではなく、行為者がすでに含意するルーチンや過去の経験が入り込んでいる。さらに、エピソード6で示したように、外出時に周るルート自体あるまじりをもったルーチンとして成り立っている。

まとめると、外出時の今ここの行為/体験は、ルールに包まれた中での能動的/選択的な行為/体験であり、行為者において含意されている過去の経験(ルーチンや持続)が入り込む行為/体験でもある。このような一連の行為/体験を「包含(Inclusion and Implication)」という言葉で包括させたい。前述のまとめを換言すると、「包含」とは以下のような過程であると言えるだろう。外出時の今ここの行為/体験において、行為者はルールを代表とする意味世界に包まれ、意味世界内の環境の意味と価値を包み込む(含意していく)作用の中にある。この「包みこまれる」作用としての今ここの行為/体験は、経験として行為者に含意される。そして、行為者に含意された(過去の)経験は、経験の持続として今ここの行為/体験に入り込んでいると理解した。

Fig.2は、「包含」という行為/体験様式を図式化したものである。①は、行為者が過去に直接経験し、含意している行為/体験である。②は、直接に経験をしていなくとも可能性として含意していること(e.g.間接的情報)、つまり、行為者の意味世界内における行為/体験である。③は、新奇な行為/体験、換言すると、行為者を包む意味世界を越えた「意味の他者」(野矢, 2002)に出会う行

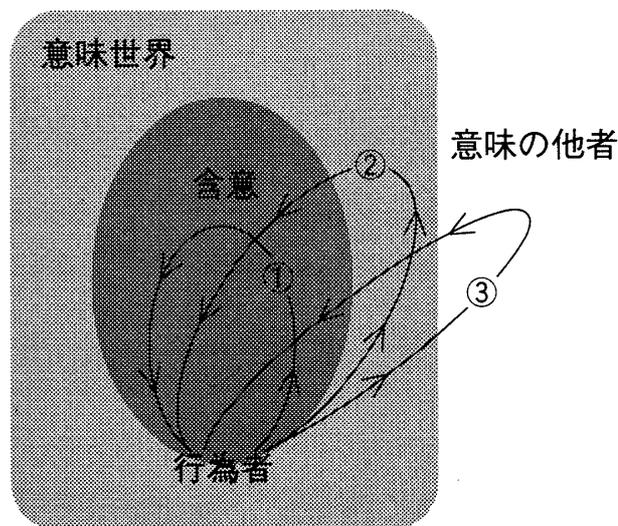


Fig.2 外出時の行為/体験に関する概略図

為/体験である。「意味の他者」とは、行為者の意味世界内にないこと、思考可能性外のことを指しており、行為者にとっては「ない」も同然のことがらである。

本論で議論してきたのは、①と②についてである。以前経験したことや間接的には知っている情報、つまり、意味世界内の意味と価値を、外出時に今ここで直接行為/体験することによって行為者が経験として含意していく、もしくは、すでに直接経験し含意していることを改めて含意する過程が外出時の行為/体験と理解した。

外出とは…今ここで直接行為/体験することにより行為者に含意される経験となっていく。知識や言語情報のようなものではなく、身体を持って行為/体験したことが行為者に含意されていく過程が外出においては重要だと思われる。Schutz(1932/1995)は、「行為」の2面性〔経過中の行為(actio)と成果としての行為(actum)]を明らかにする上で以下のように記している。「私の経過としての行為は、私があるなかで生きている、一連の今ある体験として、より詳しくいえば、今生成したかと思うと生成し去るような体験として、私に呈示される。…(中略)…さらに私の経過し去り完了した行為は、想起という反省のなかで私が向けている一連の完了した体験として、私に呈示される」。今この体験(経過中の行為)は、行為主体が体験の只中にいるため、体験を自身から切り離して捉えることが出来ない。そのためその多くは去っていく。そして、一連の流れが完了した後に想起した体験(成果としての行為)は行為主体に含意されていく。松島(2002)は記憶の忘却という現象を理解する中で、従来の記憶の空間モデルに対して「従来の記憶理論でいうところの『脳内貯蔵庫』の内部に何らかの情報がある」としても、時間的なつながり(持続)がなければ、それは主体にとって忘却されるのである」と述べている。持続する記憶、つまり、行為者が含意する経験は繰り返され(想起され)なければ忘却されるのである。このように、今この体験の多くは行為主体の知らぬうちに忘却される。また、松島は「われわれは常に記憶変化の『内部』におり、その外部に出ることが不可能」と指摘し、さらに「われわれは、記憶の『変化』に対してはそれを対象化したり把握したりすることができない、いわば無力な存在」としている。経験を含意し続けるためには、行為主体は過去の直接経験を新たに体験すること、間接的な経験を直接体験すること、つまりただ連なっていく今この行為/体験を重ねていくしかないだろう。

ただし、ただ連なっていく行為/体験においても、すでに多くの意味と価値を含意している「家(=内)」での行為/体験と、「外」という依然含意していない意味と価値を豊潤に含むこの場所に立ち、この環境に取り囲まれることにより生起する行為/体験では質を異にするだろう。外出する機会を失いがちな高齢者においては、外出

時の行為/体験を失うが故に、新たに含意した経験が積み重ならない。一方で経験(記憶)は日々忘却されていく。よって、高齢者が外出をしないことによる帰結として、含意と忘却の不釣り合いが生じ、経験の総体が脆弱になっていくことが考えられる。森(1970)は、経験に関して以下のように述べている。「経験というものが私自身の意味である。また一人一人が自分の経験を持っていて、その経験はほかの人の経験と置き換えることができない。ある一人の人間ということと、ある一つの経験ということとは全く同じことであり、そのある一つの経験というものは、一人の人間というものを定義するもので、それ以外に人間というものは考えられない」。

高齢者において外出がなぜ大切なのだろうか。リタイヤ後の生活では、外出する機会が日々当たり前を訪れてこない。そのため外出時のルールに取り囲まれ、過去の経験の持続が介在するルーチンを含んだ今この選択的行為/体験が失われることになる。今この行為/体験が失われることは必然的に「私」を形づくる経験の総体の脆弱化、もしくは「私」を取り巻く意味世界の空疎化に繋がるのではなからうか。それ故、日々の生活において外出することは大切であるだろう。

今後の課題

今回、分析をしつつ本論で扱えなかったグループが3つほどあった。1つは、Fig.1の「選択」に含まれる「選択するのは、『私』ではなく…」である。このグループは、ある選択的行為を行う時に、ここにいない誰かを背景に置きながら判断を行っていたことを指している。次に、新庄さんが息子さんにみかんを送るために外出をしたように、ここにはいない存在とのかかわりを保ち続ける「贈り物」という行為は軽視できないと考えている。遠方へ直接出かけることが徐々に難しくなる高齢者において特に大切であろう。今後議論したい。3つ目に、本研究の同行調査では、2組(佐藤さん、松岡さん)において2人の外出に同行した。その時の行為/体験は、(他の調査協力者のように)1人で私と外出する時とは異なっていたように感じられた。本課題とどのように関連するかはまだ明らかではないが、機会があれば探究したいと考えている。

謝辞

本研究が出来上がる過程においては、多くの方々のご協力をいただきました。また、本論文の作成にあたり南博文先生、丸野俊一先生から貴重なコメントをいただきました。お礼を申し上げますとともに今後ともお付き合いよろしくお願いいたします。

文 献

- 秋山哲男 2003 高齢者・障害者専用のSTサービスの現状と将来展望 老年社会科学, **25**(3), 349-359.
- ベルグソン H. 中村文郎(訳) 2001 時間と自由 岩波書店
(Bergson, H. 1889 *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*. Paris: Felix Alcan.)
- Carp, F.M. 1971 Walking as a means of transportation for retired people. *The Gerontologist*, **11**(2), 104-111.
- 堀 薫夫 2000 高齢者の生涯学習をめぐる課題と展望 老年社会科学, **22**(1), 7-11.
- ジェイムズ W. 今田 寛(訳) 1992 心理学(下) 岩波書店
(James, W. 1892 *Psychology: Briefer Course*. NY: Henry Holt.)
- 国土交通省 2002 平成11年全国都市パーソントリップ調査 都市における人の動き:分析結果からみた都市交通の特性.
- 松本光太郎 2004 高齢者の外出における「立ち寄り」の検討:ある地域に居住する高齢者への自由記述アンケートから 九州大学心理学研究, **5**, 77-88.
- 松本光太郎 審査中 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値:在宅高齢者の外出に同行して
- 松島恵介 2002 記憶の持続 自己の持続 金子書房
- Mead, G.H. 1932 *The Philosophy of the Present*. Illinois: The Open Court Publishing Company.
- 森 有正 1970 生きることと考えること 講談社
- 無藤 隆 1997 協同するからだことば 金子書房
- 野矢茂樹 2002 『論理哲学論考』を読む 哲学書房
- 竹嶋祥夫 1993 立地条件の違いによる高齢者の外出行動に関する研究:有料老人ホーム居住者を事例として 老年社会科学, **15**(1), 15-29.
- リード S.E. 細田直哉(訳) 2000 アフォーダンスの心理学:生態心理学への道 新曜社
(Reed, S.E. 1996 *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. NY: Oxford University Press.)
- シュッツ A. 佐藤嘉一(訳) 1982 社会的世界の意味構成 木鐸社
(Schutz, A. 1932 *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt*. Wien: Springer.)
- 副田義也 1997 老年社会学の展望と批判 岩波講座13 現代社会学:成熟と老いの社会学 井上 俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉(編) 岩波書店 Pp197-214.
- タウンモビリティ推進研究会 1999 タウンモビリティと賑わいまちづくり:高齢社会のバリアフリーショッピング 学芸出版社